



洋上アルプス

No.248 平成27年11月5日

発行
林野庁屋久島森林生態系保全センター



バックナンバーや屋久島国有林における入林許可申請等様式のダウンロードはこちらにあります

http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/



鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1

TEL0997-42-0331 FAX0997-42-0333



大分舞鶴高校14名の生徒が植生調査を体験

10月10日、宮之浦嶽国有林224林班外において大分舞鶴高校の生徒14人が今年で3回目となる植生調査の体験をしました。

この研修は、世界的にも貴重な生態系を誇る屋久島を研修のフィールドとして、自然に対する感動を伴いながら調査研究活動を行うことにより、今後、生徒達が必要とする実践的な基礎踏査技能や将来の科学系人材として能力や態度を育成することを目的として毎年、屋久島で実施しています。

今回も2泊3日の日程で訪れ、初日は雨の中、生徒は2班



樹木の調査実行中



保全センター玄関前で

に分かれ、事前に設けてあったプロット内の樹木の位置、樹高及び直径などを計測しました。初めて体験する作業で、ヤマヒルの洗礼を受けた生徒もいましたが、生徒は各班ごと力を合わせ一生懸命作業に取り組んでいました。その後、当保全センターに場所を移し、山下所長がプロジェクタを使って今回の調査のねらいや毎木調査したデータをどのように活用するかなどについて説明を行いました。生徒は熱心に耳を傾けていました。最後に時間を延長するほどの活発な質疑応答となり、充実した体験学習となりました。

全国大学演習林職員が来島

10月25日から28日までの4日間にわたり、「第24回九州地区農学部附属演習林技術職員研修」が開催され、東京大学等7大学の演習林技術職員12名が参加しました。

同研修では、「屋久島の森林と林業概要および環境保全の取組」と題し、樋口屋久島森林管理署長と坂梨生態系管理指導官による屋久島の国有林に係わる業務や生態系等の講義、安房貯木場および宮之浦森林事務所管内の間伐生産現場の見学などが行われ、屋久島の森林・林業に対する理解を深め合いました。



大学演習林職員の皆様

森林・林業の技術交流発表大会…屋久島から 3 課題発表

10月27日(火)から2日間に渡り九州森林管理局で開催された「森林・林業の技術交流発表大会」において、屋久島森林管理署と当保全センターから3課題を発表しました。

●屋久島におけるスギ品種別展示林の成長量比較と苗木育成のあり方

発表者：小瀬田森林官（松本）・森林技術指導官（藤川）

屋久島の人工林が主伐・再造林を迎え、苗木の確保が喫緊の課題となっている現状と、今後の人工林の苗木のあり方について、スギ品種別展示林の成長量調査結果を検証し、屋久杉実生苗の優位性を発表しました。



ステージで発表する松本・藤川

●公益的機能維持増進協定にかかる外来種アブラギリ駆除法の検討

発表者：地域技術官（村上）・森林技術指導官（藤川）

屋久島に急速に侵入拡大した外来種アブラギリの生態系への影響とアブラギリの駆除方法について一定の駆除方針（案）が整理できたので、その取組成果について発表しました。



発表する村上・藤川

●『広報誌洋上アルプス・手作り植物図鑑・・・』世界自然遺産屋久島からの情報発信

発表者：生態系管理指導官（山崎）・専門官（竹部）

平成7年に設置された当保全センターがこれまでに取り組んできた情報発信、広報誌洋上アルプスや様々な教材として活用した書籍等を紹介、今後もさらなるPRに努めることを発表しました。



発表する山崎・竹部

「やんばる森林ツーリズム」実施ワーキンググループが屋久島視察

10月30日(金)、沖縄本島北部の山原地域3村などの15名が、平成27年から29年度の3カ年に渡って実施する「やんばる型森林ツーリズム推進体制構築事業」の達成のため、先進地域である屋久島へ視察に訪れました。

視察団は、最初に当保全センターで①森林生態系保全に関する取組事例②普及教育、森林空間利用に関する取組事例について山下所長から、屋久島レクリエーションの森保護管理協議会の内田さんから、協議会の概要及び取組について説明を受け、その後白谷雲水峡に移動し雨の中、50分コースを散策しながら現地職員からの説明に聞き入っていました。



保全センターでの概要説明

屋久島のニホンザル研究 一第2回一

調査開始年：昭和49年～

半谷 吾郎 (京都大学霊長類研究所)

西部林道では、たくさんの研究者が、それぞれのテーマに沿って、数か月から数年、ニホンザルの行動観察に基づく調査を行っています。これまでこの地域でニホンザル調査を行ったことのある人は、論文を出版した人に限っても40人以上、論文の数は英語論文だけで130本以上。採食行動、音声、社会関係、性行動、種子散布などの植物との関係、遺伝的多様性など、テーマは非常に多岐に及びます。その中のひとつを紹介しましょう。

わたしの研究室の大学院生だった澤田晶子さんは、サルのキノコ食を研究しました。キノコはサルの大好物ですが、観察による同定が極めて困難で、研究がほとんど進んでいませんでした。彼女は、サルが落としたキノコの断片を集め、そこからDNAを抽出し、遺伝情報をもとにキノコの種を同定しました。1年間の調査の結果、サルが67種もの多様なキノコを食べていることが分かりました。知られている限り、これほど多くの種のキノコを食べている動物は、ほかにいません。

キノコ食が興味深いのは、キノコにはしばしば毒があることです。彼女はサルがキノコを食べる行動に着目し、毒キノコをどのように避けているかを明らかにしました。まず、ニホンザルが躊躇なく手にして食べ始めたキノコは、においをかいだりじっと見たりといった、検査する行動が見られる場合よりも毒キノコである割合が低く、ある程度毒キノコについて事前の知識を持っていることが示唆されました。一方、検査の結果食べることにしたキノコも、食べるのをやめたキノコも、毒キノコの割合は変わらず、においや見た目をよく検査しても、毒キノコを見分けられるわけではないことが分かりました。

しかし、サルが途中で食べるのをやめてしまったキノコは、最後まで食べたキノコより、毒キノコの割合が高くなっていました。つまり、サルはある程度は事前に何が毒キノコか知っている。臭いや見た目をいくら調べても毒があるかは判断できず、結局食べてみなければわからない。実は、人もサルも同じだったということです。



写真2

サルが手に取って食べなかったキノコ

(つづく)



写真1 キノコを食べるニホンザル

屋久島の植物



シマサルナシ
(マタタビ科)

紀伊半島以南に分布する落葉のつる性木本。果実は長さ3〜4cmで外形や割った中身はキウイフルーツにそっくり。表面は茶色でざらつく。仲間であるウラシロマタタビの果実の表面は黄緑色で無毛、屋久島ではシマサルナシより高標高域まで分布する。

花期4〜6月、果期10〜11月。

屋久島生態系モニタリング



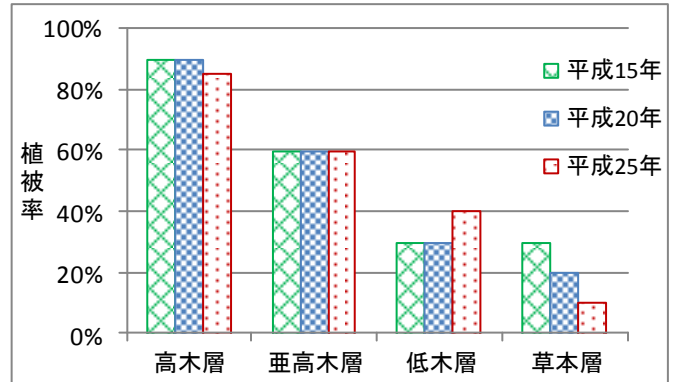
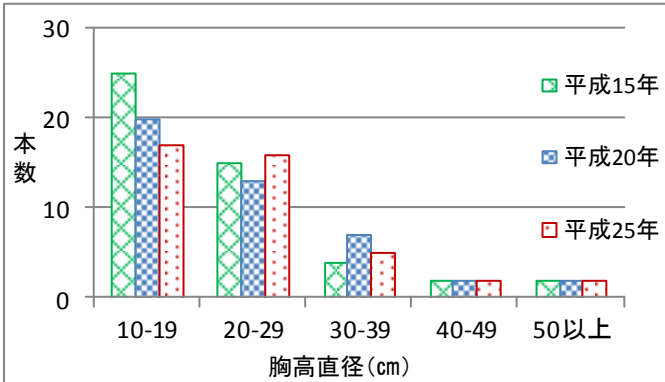
屋久島南部等の植生垂直分布調査（平成25年度）

●標高5㍍プロット（田代ヶ浜風景林 [海岸林]）

[高木層]モクダチバナ、ヤマモモ、フカノキ、タブノキ、ハゼノキが多く生育し、クロキ、ヤブニッケイなどが混生。**[亜高木層]**モクダチバナが優占し、ヤブツバキ、フカノキ、イヌビワ等が混生。**[低木層]**モクダチバナが圧倒的に多く、クロキ、ボショウジ、イヌビワ等が混生。**[草本層]**アオノクマタケランが全体的に出現し、モクダチバナ、フカノキの稚樹が多い。ホソバカナワラビも比較的多く出現。

[胸高直径階別幹本数]胸高直径10-19 cmの本数が多少変化し経年ごとに減少していたが、旧小プロット内での全体では殆ど変化がなかった。（旧小プロット10×30㍍。新規小プロット（10×30㍍）を増設。）

[階層別植被率]高木層・亜高木層・低木層は過年度（平成15年度及び20年度）と本年度で殆ど変わらなかったが、草本層については、経年的に植被率が低下している傾向が見られる。被圧による影響以外にヤクシカの影響も考えられる。



[調査結果の概要]照葉樹が優占する広葉樹二次林の海岸林。下層植生の植被率は平成15年度から30%、20%、10%と少なくなっている。被圧による影響のほかにヤクシカの採食圧の影響が考えられる。



巨樹・著名木 屋久杉

くぐり杉

屋久島には、屋久杉の根元を潜り抜ける大木がいくつもあります。このヤクスギランドのくぐり杉は、上方の屋久杉が倒れ込んで2本が合体したと思われる若い屋久杉です。白谷雲水峡にあるくぐり杉は、倒木更新後に下の木が腐り根元が潜れるようになったものです。

くぐり杉にはヤマグルマ、サクラツツジ、マルバヤマシグレ、ナナカマド、カクレミノ、アセビが着生しています。

- 樹高：25.7㍍
- 胸高周囲：3.2㍍
- 樹齢：推定1000年未満
- 標高：1010㍍
- 場所：ヤクスギランド30分コース

